|  |
| --- |
| Full-Scape Wizard |

|  |
| --- |
| 2020年9月4日 |

４章＿赤使い編

　メグルとブーリアンの２人は山道を歩いていた。

　イナーボ地方を出立してから５日目に当たる晴れた日の出来事だ。晴れた日といっても2人は鬱蒼とした木々の下おり、暗がりの中を歩いている。

　この地方はカンナラビと呼ばれており、国を南北に分断する山脈が地方の大半を占めている。

「そろそろ、看板があるはずなんだが」とエデューが地図を広げながら言った。

　その後、１時間ほど歩いたところで苔むした看板を見つけた。看板にはただ『紅蓮』とだけ書いてある。

「これだ」と看板を指さしてブーリアンが言う。「そろそろ目的地にたどりつくはずだ」「その看板、かなりの期間で手入れをされてないみたいですよ」

「確かにな」とエデューが説明を始める。「これから会うのは『紅蓮』と呼ばれている一族の1人だ。赤魔法―攻撃に特化した魔法使いの集団だ。良く言えば勇猛果敢、せっかちで感情的な奴らだ」

　メグルは彼らを想像する。熊の毛皮を被った筋骨隆々の大男。一様に頭を丸め鍛錬として燃え滾る床の上を歩く修行僧。炎を囲み一心不乱に呪文を唱える集団。―どれを想像しても仲良くなれるとは思えなかった。

　メグルとエデューは看板に導かれ、『紅蓮』の本拠地にたどり着いた。

　そこは山の斜面に面した、石造りの建物があった。大きさはメグルの住んでいる市の市民体育館ほどで、建物の奥の方は山の斜面にめり込んでいる。

「誰かいないか」とエデューは建物の内部に向かって呼びかける。

　しかし、呼びかけが反響するだけで返事は無かった。

　建物には大きな鉄の扉があり、エデューが押してみると内側に動いた。

　二人は建物の中に入る。

　建物内部は等間隔で炎が炊かれており、薄暗いが内部の様子は見て取れた。

「炎が炊かれているってことは、少し前に誰かがここにいたってことですよね」とメグルが言う。

　エデューがそれに同意する。

　2人は人の気配がない空間を歩く。

　しばらくすると、メグルは断続的に聞こえる音に気が付いた。その音は、コンロの着火のボッボという音に似ている。同じペースで燃え続けるではなく、新しく火を灯したり、出力を上げたりする音だ。

　メグルは耳を澄ませて、音の発生源に歩みを進める。エデューがその後ろに続く。

　ある部屋の入口に揺れる光が見える。

　メグルが部屋をのぞき込もうとしたその瞬間、部屋の内側から炎の渦が流れ出てメグルの鼻先をかすめる。大きくのけ反りメグルはしりもちをついた。

　地面に転がっているメグルをよけてエデューが部屋をのぞき込む。

「久しぶりだな、コッチネラ」エデューが部屋の中の人物に声をかける。

「わざわざこんなところまで何の用？」

　返事の声は少し高めで少年もしくは女性に聞こえた。

　声の主が姿を現す。20代半ば―メグルからすると数歳年上―と思わる女性だった。

「何年振りだ。わが弟子よ」とエデューがいう。

「もう、弟子じゃないよ」

「一人前になった後でも―」

　エデューの言葉をコッチネラ遮る。

「そういう意味じゃない。あたしはアンタの下から逃げだしたろ」

「気にしてないよ。ずっと訓練は続けているんだな」訓練―先ほどコッチネラが独りで魔法を使っていたことを指してエデューが言う。

「別に……」とコッチネラが言う。「やらないとしっくりこないだけだよ」

　口調に反して、彼女の表情は和らいで見える。

「先輩弟子として、ここはひとつ引き受けてくれないか」

「やだよ。そもそも弟子じゃないし……」コッチネラがメグルに向き直る。「―そもそも誰なの？」

「暁メグルです」

「あたしは『紅蓮』のコッチネラ」

「さっきコッチネラさんが唱えていた魔法って、もしかして《トーモス・イフキ》ですか？」

「《トーモス・ツジゼ》だよ。ホフル系統だからかなり似てるね。で？　それがどうしたの」

「だったら、習うのはいいです」

「え？」とコッチネラとエデューが同時に口にして、目を見開く。

「少し前にならず者達が似た魔法を使っているところに出くわしたんです」とメグルが答える。

「―で？」コッチネラが問いかける。「そんな奴らと同じ魔法を使いたくないってわけ？」

　メグルがうなずく。

「それに、今の俺でも防御に専念すれば、相手の魔力が尽きるまで持ちこたえられます。一対一、生半可な攻撃なら数人相手でも」

「そういうことね」コッチネラがため息つく。「なら、本物の赤魔法を味わっても同じことが言えるかどうか試してみようじゃない」

　そう言った後、コッチネラがメグルをある場所に誘導し始める。

　エデューがメグルの隣に来てささやく。

「やったな。やる気になってくれたみたいだ。あいつは負けず嫌いで意地っ張りだ。だから、『押してダメなら引いてみる』作戦に変えたのはナイス機転だぞ」

「気が進まないのは本心です」

　メグルが案内されたのはバスケットコートほどの空間だった。

　彼は周囲を見渡した。所々に遮蔽物が存在しており、物影を拾いながら移動できるようになっている。部屋の角には部屋の全域を見渡せる物見台があった。

「訓練場だよ」とコッチネラが言う。

　コッチネラが部屋の隅にある用具箱をから何かは探し始める。

　お目当てのものを発見し、メグルに手渡した。

　渡されたものは、紐でくくられた紙風船だった。

「そいつを体に括り付けて。―そんでもって、そいつを魔法で破壊した方が勝ちね」とコッチネラが一方的に進める。

　メグルが詳細を訊いたところ、コッチネラ達―『紅蓮』―の試合の方法らしい。相手の体に直接攻撃すると大怪我するので、その代わりに体から少し離れた位置に的―紙風船―を用意してそこを攻撃するようになったらしい。ちなみに、紙風船を手でひっぱたりして相手の攻撃を避けることはルール違反ではないのだが、コッチネラ曰く「構わないけど、体に寄せてると的もろとも丸焦げにするけど。それでいい？」とのことだ。

　メグルとコッチネラが部屋の対頂角にそれぞれ移動した。一方、エデューは物見台の上に上がった。

「二人とも準備はいいか？」エデューが言う。「試合開始っ！」

　試合開始時点では、二人の間に射線は通っているが、お互いにすぐに物影に隠れることが出来る状況になっている。

　先手を取ったのはコッチネラだ。

「《トーモス・カルラ》」と呪文を唱える。

　二重らせんを描きながら炎がメグルに向かって直進する。

　それに対してメグルは、物影に隠れて回避する。

　メグルの耳に「《トーモス・ミタマ》」という呪文が5、6回聞こえた。その後、炎を圧縮したような緋色の野球ボールほどの玉が頭上から降ってきた。

「爆発する前に打ち消さないと危ないぞ」と壁越しにコッチネラの声が聞こえた。

　あちこちから爆発音が鳴り響く。メグルはすぐさま打消し魔法である《ナギ・ゼクー》を緋色の玉にかける。

　その後も《トーモス・ミタマ》を何度も使ってコッチネラはメグルを追い立てる。

　コッチネラがメグルの前に姿を現す。

「撃ってきなよ。この距離なら届くでしょ」コッチネラが促す。

「《スミル・シャガン》」メグルが水流を打ち出す。

「《トーモス・トーバリ》」

　コッチネラが呪文を唱えると炎の幕が地面から立ち上り、二人の間を遮った。メグルの放った水流は炎の幕を通過する前に蒸発していった。

「《トーモス・ツムージ》」炎を向こう側でコッチネラが別の呪文を唱えた。

　フリスビーのような円盤状にする炎が幕の向こう側から現れた。メグルがそれを打ち消す。

　続けざまに円盤が迫りくる、4発円盤をいなしたところで攻撃が止んだ。

　メグルは炎の幕そのものに打消し魔法を放つ。魔法が相殺するその瞬間に、背後から気配を感じた。

「はい。あたしの勝ち」と後ろ声がした。それと、チリチリと紙風船が燃える音もする。　振り向くとコッチネラがしたり顔で立っていた。

　エデューが物見台から降りてくる。

「容赦ないな、コッチネラ」とエデューが言う。

「手加減とか、そういうまどろっこしいのは苦手なんだよ。それとも手加減した方がよかった」

「全然」とメグルが否定する。「手加減しといて、負けそうになると本気出すのが一番ムカつく」

「同感」とコッチネラが笑みを浮かべる。「立ち話もなんだしとりあえず戻ろうか」

　廊下を歩いている最中にメグルが問いかける。

「そういえば、コッチネラさんが炎のカーテンの裏からおれの背後に一瞬で移動ってなんの魔法ですか？」

「え？　普通に歩いてだけど」とコッチネラが答える。

「メグルの視点からだとそう見えたのか」が語り始める。「あれは《トーモス・ツムージ》の軌道を曲げることで、あたかも同じ立ち位置から発射しているように見せかけていたんだ」

「こんな風にね。《トーモス・ツムージ》」

　炎の円盤が三人の修正を旋回する。メグルがそれを興味深々に目で追う。

「気に入ったんなら、これからたっぷり教えてやるよ」

　訓練場にて、コッチネラがメグルに説明をしている。

「まずは《トーモス》系統の中で一番基本的な魔法―《トーモス・イフキ》―から始めるよ」

　確か、ブーリアンの塾を襲った奴らが使っていた魔法だな。そう思いだしてメグルは苦い顔をする。

「何さ、その表情は」

「いえ、なんでもないです……」

「思い出した。どこぞのチンピラが同じ魔法を使ってたってやつね。でもさ、『嫌いな奴が使っていた技を使わない』なんてルールを課してたら、最終的に何も使えなくなるぜ」「頭ではわかってますよ。気持ちではまだ受け入れ切れてないけど」

「それにな、火炎魔法はどれほどの威力があるのがか客観的に判断出る類の魔法だ。つまり、相手にぶち込むより前に、そいつは白旗を上げるんだ。だから、むしろ戦いたくないお前向きなんだよ。」

　コッチネラが《トーモス・イフキ》の説明をする。

「《トーモス》系統に代表される赤魔法に使用できる風景は山、高木や塔など空高くそびえるもの全般だ」

　続いて印についても説明する。五本の指を前方に向けた形だ。

　コッチネラが唱えるように促す。

「《トーモス・イフキ》」と唱えると一瞬だけ炎が上がった。

「上出来、上出来」

「最低限の覚えてもらわなきゃならない魔法がもう一つあるんだ」

「最低限ってどういうことですか」

　コッチネラが、積みあがった瓦礫の山を指さす。

「前回教えた、魔法をあそこめがけて撃ってみて」

　指示された通り、メグルは《トーモス・イフキ》を唱える。

　炎が瓦礫をなめ、表面に焦げ目がついた。

「見ての通り、《トーモス・イフキ》には熱によって対象を焼くことはできるが、爆発などの衝撃はほぼない。―で、そういう場合に使うのがこいつだ。《トーモス・ミタマ》」

　コッチネラの右手に炎の球が握られる。そして、そしてその球を瓦礫の山めがけて放り投げた。

　爆発で、瓦礫の山が崩れた。

「使い分けか……」とメグルがつぶやく。「《トーモス・ミタマ》」メグルが呪文を唱える。

　手の中に現れた炎の球を投げ、地面に当たり爆発した。

「以前戦った時には、時間が経ってから爆発していたような気がするんですが、別の呪文でしたっけ？」とメグルが訊く。

「同じだよ。魔力の込め方を調節すると一定時間経つと爆発するように出来るんだ。何て言うかな―一度炎の球を作った後に殻を被せるイメージ……かな」

　メグルがもう一度《トーモス・ミタマ》を唱える。

　その球は時間が経ってもなかなか爆発しなかった。

　不発かな、と言ってメグルが様子を見に行こうとするのコッチネラが止める。

「いったん休憩入ろうか」とコッチネラが言う。

　２人が部屋を出たと同時に、背後で爆音が鳴り響いた。

「な、近づかなくてよかっただろ」

　訓練場にて今日の訓練が始まった。

「これから、教えるのは一番アンタが身に着けるべきテクニックで」コッチネラが説明を始める。「一般的に『流し込み』と言われているものだね。自分の魔力を他人の魔法に流し込む技術」

「確かに、魔力が大量にあるおれ向きですね」とメグルが言う。

「やり方は、相手に触れた状態で風景を思い浮かべるだけ。普段魔法を使うときの動作の呪文を＜印＞を取り除いたって言った方がいいかな」

　コッチネラがメグルをそばに来るように合図を送る。

「それじゃ早速やってみようか」

　メグルが手を伸ばすが、ふと動きを止める。

「何してんの」とコッチネラが訊く。

「どこに触れるべきかなと」

「じゃあここにしな」と言って左手を差し出す。

　メグルがコッチネラの手の甲に掌を被せる。

　コッチネラが《トーモス・イフキ》を唱える。一方のメグルは風景を思い浮かべて魔力を流し込んだ。

　魔力の量に応じて、炎が大きくなる。だが、時折勢いが弱まった。その原因は―

「時々手が離れるから、魔力が安定してない」とコッチネラが愚痴る。

　彼女がメグルの手を振り払ってから、逆にメグルの他を鷲掴みする。

「変におどおどしながら触れてる方が、かえってやらしいんだよ」とコッチネラが言う

　《トーモス・イフキ》が止まる。

「『流し込み』についてはこんなところかな」

　メグルとコッチネラは山道を歩いていた。

　道の脇には石像が2,30体ひざまずいていた。身長は2メートル半ほどで、胸元にタコのような彫刻が施されている。そこの下には文字が書かれているが、かすれて断片的にしか読み取れない。ヨグ……エル……リッチ？

「そこの石像たちは何です？」とメグルが石像に触れながら「『紅蓮』の人たちが作ったんですか？」

「あたし達とは無関係。戦争時の兵器―今となっては休眠中のゴーレムさ」

　兵器と聞いて、メグルがビクっと手を引く。

「怖がりだなぁ」とコッチネラが笑う。「そいつらはもう動かないよ」

「本当に？」

「本当にさ。一般的にゴーレムは術者の血液が動かすための鍵になっている。一応、あたしの血でも試してみたけど、1ミリも動かなかったね。だから、あんたが撫でたくらいじゃそいつは起きないよ。試しにやってみる？」

「嫌ですよ。単に切り傷増えるだけじゃないですか」

　と言っているものの。メグルの警戒心は解けない。

「やろうと思えばあたしの魔法でもぶっ壊せるし」

「じゃあ、壊しておけばいいじゃないですか」

「まぁ、実害は無いし。あとは、結構固いんだよ、そいつ。面倒だからやりたくないの」

　2人は石像たちをしり目に歩みを進めた。

　メグルの足元の倒木が割れた。踏み外した左足に木の破片が刺さった。

「つ…。」メグルがうずくまる。

「おいおい、大丈夫か」先行していたコッチネラが振り返る。

　コッチネラがメグルの元に駆け寄って傷口を観察する。「骨や腱は以上はなさそうだが―」

「解説しないで、傷口を想像したら気分悪くなってきた……」とメグルが呻く。

　コッチネラは無言で観察する。結構深い。ギリギリ歩けなくもないが、とっとと帰って治療しないといけないな。「たぶん大丈夫」と最後に口に出した。

　コッチネラが肩を貸そうとするが、大丈夫、と言ってメグルは立ち上がる。

　メグルは足を引きずってしばらく歩き、近くの石に腰かけた。怪我した左足を石段に乗せる。足の下にはタコのような彫刻―ゴーレムの胸元に合ったものと同じもの―が彫られている。ポタポタと血が彫刻に滴る。

　すると何重にも重なった雷鳴が響き渡り、そのあとに徐々にこっちに近づいてくる地響きがが続く。

　2人の目に、木々を踏み倒しながら前進するゴーレムの群れが映った。

　―一般的にゴーレムは術者の血液が動かすための鍵になっている。メグルはコッチネラが話してくれたことを思い出した。そう、血がトリガーだ。でもコチ姐さんの血液には反応しなかった話してたよな……。

「おい！　あんたがさせたんだろ。何とかしてよ」とコッチネラがわめく。

　メグルがゴーレム達に対し、停止するように命じるが一向に止まる気配がない。

「コチ姉だけでも、逃げないと―」

　メグルの声を遮って、コッチネラが彼の前に仁王立ちする。

「さてと、一仕事しちゃいますか」コッチネラが不敵に笑みを浮かべる。「メグルは後ろ―」

「俺も戦います」

「バカ、最後まで聞きなよ。後ろの奴らは任せた。それとも、こう言った方がいいかい。アタシの背中はアンタが守れ」

「了解……」

　2人背中合わせになり、ゴーレムの群れに向かって魔法の構えをとる。

「《トーモス・トーバリ》」コッチネラがゴレームとの間に炎の幕を展開する。「これで足止めできれば、話は楽なんだけど」

　ゴレームをものともせずに幕を突き破って前進して来た。

「ちくしょう、効果が無え」

　コッチネラが《トーモス・トーバリ》を停止させた。炎の幕が効かないとなると、熱そのものよりも爆破の衝撃を重視するか。

「《トーモス・ミタマ》」コッチネラが火炎の球を投げつける。

　火炎の球がゴーレムの脚部で炸裂する。脚部がばらばらになり、ゴーレムが倒れる。本体は残っている体だけでもがいているが、欠損した脚は砕け散ったままだ。

　2人の魔法使いは、続けて《トーモス・ミタマ》と唱える。

　じりじりと迫る大軍を爆風が吹き飛ばしていく。追いつめられるのが先か、破壊しきるのが先かの勝負だった。メグルは目前にまで迫っていた最後の一体に《トーモス・ミタマ》は放つ。

　最後のゴーレムが瓦礫になった。メグルも爆風に煽られた。

「終わったみたいだな」コッチネラが一息つく。

　周囲からズルズルと引きずるような音がした。

　ゴレームだった破片が一か所に集まっていく。

「このパターンってもしかして……」メグルの言葉が途切れる。

「最後まで言ってよ、気になるじゃんか」

「ボスキャラ、デカいやつが来ます」

　一か所に集まった瓦礫は巨人へと姿を変えた。

「《トーモス・ミタマ》」と二人は呪文を唱える。

　猛攻撃が巨人に炸裂し、舞い上がった粉塵が巨人の姿を隠した。

「止めて」とコッチネラが言う。「多分やったはず……」

　2人の魔法使いは粉塵が収まるのを待つ。変わらず前進してくる巨人だった。表面こそ損傷を受けているが、ダメージを受けている様子はない。

「仕方ない、奥の手を使うか」コッチネラが深呼吸をする。「《トーモス・シン・アニマ》」

　コッチネラの前方に巨大な火の玉が出現する。そのサイズは目の前の合体したゴーレムに互角に見える。その火の玉が回転しながら巨大な虎に姿を変えた。

　炎の虎とゴーレムが激突する。炎の虎がゴーレムに左腕に噛みつく。それをゴーレムが引きはがして投げ飛ばす。

「まだだ」とコッチネラがつぶやく。「ありったけの魔力でぶち込んでやる」

　コチ姉を助けないと。メグルが歯を食いしばりながら立ち上がる。

　二つの巨体の膂力が拮抗したかに見えたが、一歩ずつコッチネラの方が押されて行っている。二人の目の間で巨体が迫った次の瞬間、炎の巨獣が呻り声をあげてゴーレムを押し返した。

　コッチネラは自分の手の甲にメグルの手が重ねられているのに気が付いた。

「全力で魔力を流し込みます。あのデカブツに叩き込んでください」とメグルが言う。

「応！」

　炎の虎がゴーレムを押し倒し、首元に牙を突き立てる。最後に、爆発が起こり岩石が木っ端みじんになった。ばらばらになった岩石はもう集まることはなかった。

　メグルが照れながら、触れていた握っていた手を放す。

「やったな」コッチネラとメグルが拳を合わせる。

　一息ついてからメグルが言う。

「やっぱり、肩貸してください」

「最初っからお姉さんを頼ればよかったんだよ。さっきのは中々だったぜ」

　メグルはコッチネラと一緒に紅蓮の本拠地に戻った。

「おいおいどうしたお前ら」エデューが出迎える。「その傷は何だ」

「先の戦の跡片付けを少々……」メグルがいきさつを説明する。

　説明をエデューが今後の予定を語る。メグルは足が治るまで安静にして、治り次第首都に出発とのことだ。

　出発の早朝、まだ日の出前の時刻。メグルは布団の中で誰かが枕元に立っている気配を感じた。

　目を開けるとそこにはコッチネラがいた。彼女は、口の元に指を立てて「静かに」と合図を送っている。

　2人は部屋を出て暗がりの中に立っている。

「こんな時間に何なんですか」とメグルが訊く。

「出発する前に見せたいものがある」コッチネラが答える。「何て言うかその……選別かな。きっと役に立つ時が来ると思う」

　メグルはうなずいて、コッチネラの後を歩く。

　たどり着いたのは、『立ち入り禁止』と書かれてた扉だった。

（DOTO：伏線として中盤でチラ見せもアリ）

「何年振りかなこの扉を開くのは」コッチネラがつぶやきながら、扉を開ける。

　通り過ぎる際にメグルは別の注意書きを発見する。

『この先、道を知らぬ者通るべからず。さもなくば、屍となろう』

「ここ、本当に大丈夫ですか」メグルが訝しむ。

「あたしは道を知ってるから問題なしさ」

　コッチネラがタオルサイズの布のメグルに手渡す。

「これで、目隠しして。部外者に道順を覚えられると面倒なことになるから」

　メグルは指示通りに目隠しを着けた。

　コッチネラがメグルに左手を掴んで歩き出した。

（TODO：気が向いたら詳細を書く。

　　・覚え歌を歌いながら道を思い出すが、微妙にコチ姉。

　　・目隠しを外す直前に、目隠し越しに日の光を感じる。澄んだ空気を感じ）

　メグルの体感としては20分ほど歩いた後に、目隠しを外すように促された。

　視界に現れたのは、盃状の岩山から顔を出す太陽だった。

「この位置からだと、太陽と山がちょうど重なるのか。皿の上に太陽が乗っかってるみたいですね」とメグルが言う。

「でしょ」とコッチネラが答える。

「でも、なんでこの場所が立ち入り禁止に？　単なる絶景スポットにしか見えませんけど」

「この風景は『紅蓮』の魔法使いたちにとっての切り札なんだ。固有魔法の《トーモス・シン・アニマ》に対応する風景がここってわけ」

（TODO：『固有魔法』については魔法塾で名前だけ出しといてもいいかもしれない。）

「つまり、ここの風景を知っている人しか使えない魔法があるってことですか」

「そういうこと」

　コッチネラが両手でボールを包み込むような《印》を作る。

「《トーモス・シン・アニマ》」

　目の前に炎の虎が姿をあらわす。サイズは柴犬ほどだ。

「ゴーレムを倒した魔法だ。でも、ずいぶん小さいですね」

「最低限の魔力しか込めてないからね。アンタもやってみな」

　同じように《印》を作りメグルも呪文を唱える。「《トーモス・シン・アニマ》」

　出てきたのトサカのある炎の鳥だった。

「なんの鳥だろこれ。鶏かな」さらに考えて「キジか。色がオレンジだったからわかりずらかった」

「懐かしいな」とコッチネラが言う。「せいぜい大事しろよ」

「そういえば」メグルがふと気が付く「結構日が昇りましたね」

「やばい、そろそろ戻らないと。目隠しは無しでいいって！」

　2人は来た道を戻った。

　メグルとコッチネラは立ち入り禁止の扉の息を整える。

「秘密の道順なんだけど、さすがに一回通っただけじゃ覚えられないよな」

　メグルが目を閉じて記憶を探る、例の絶景スポットから迷路を歩きここまで来るまでを脳内に映像として映す。

「多分、覚えちゃってます。道順とか風景に関する記憶力だけはなぜか高いので」

「このバカ。道順はすぐに忘れろ」

「そんな言われても困りますよ」

「だったら、せめて忘れたふりをしろ。『固有魔法』の場所への行き方を知っているってこと自体が危険なんだよ」

「分かりました。二人だけの秘密ですね」

　部屋に戻るとエデューが待っていた。

「朝っぱらから、２人で何してたんだか……。よしメグル。準備はできているか」

　メグルは昨日のうちに準備したと答える。

　エデューは今から出発すると言い渡した。

　紅蓮の本拠地の入口の前でコッチネラがメグルとエデューを見送る。